

大阪の 社会福祉

2020.7

782

The social welfare
in OSAKA

- 市社協・区社協
いつもの居場所で、
こどもたちとの継続したつながりを
- 地域でつながり続けるために
—高齢者への配食活動を通して見えてきたこと—
- 感染対策に気をつけながら活動再開へ
- シカゴの社会福祉 視察研修参加者レポート⑦
- 市社協へ特集・参画と協働のための地域福祉ガイドブック⑤
企業・商店×地域—つながる・ひろがる地域貢献活動—
- はじめまして！こんにちは
NPO法人子どもネットワーク・ワルツ
いつも最優先は子どもたち
- 8 7 5 4 3 2



社会福祉 大阪市社会福祉協議会

<http://www.osaka-sishakyo.jp>

集まれなかったいつもの居場所でお弁当を手に
こどもたちに笑顔が広がる（団地の寺子屋・城東区）
※みんな食堂等への弁当を配付。（2面に関連記事）

市社協
区社協

コロナの中でも 活動を一歩ずつ前へ

新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言は解除されたものの、引き続き感染防止に留意しながらの生活が求められている。

地域住民が主体となって長年積み重ねてこられた地域福祉活動においても「新しい生活様式」等に即した対応を検討・実施していく必要に迫られている。ふれあいや交流について制約せざるを得ない部分もあるが、少しずつではあっても安心して地域福祉活動が再開できるよう、地域の中で知恵を出し合

い、実情に応じたさまざまな工夫をしながら、人と人とのつながりづくりの取組みがすすめられている。

今号では、市・区社協が推進する「外出自粛高齢者・障がい者等見守り支援事業」について、みんな食堂等（こどもの居場所活動を含む）への弁当の配付（2面）、一人暮らし高齢者等への配食の取組みの統報（3面）とともに、活動再開に向けての動き（4面）を紹介する。

※みんな食堂：世代を超えて地域の誰もが参加できる「食を通じたみんなの居場所」

HB

コロナは落ち着いたのか、休憩しているだけなのか、なんとも不安な毎日を過ごしている。10万円の申請書は届いたけれど、マスクはまだ来ない。10万円もマスクもどちらでもいいという人もいるだろうけれど、コロナで人生がすっかり変わりそうな若者もいる。▼実家は市内で粉もん食堂。本人は大学に行きながら、両親と一人の店員で運営していたのだけれど、父親が2月にがんだとわかり手術。母親が心労で突発性難聴に。頼りにしていた店員も辞め、店は再開したけれど、19歳の少年一人の手に委ねられた。▼毎日、慣れない手つきでキャベツ6個を千切りしているとか。左手中指の絆創膏が痛々しかった。オンライン授業の大学からの情報も全く得ておらず、授業料は払ったものの、大学を続ける余裕はない。▼日本の福祉は従来から申請主義で、自分から窓口に出かけなければ、何も困っていないのと同じ。しかし、社会のことが何もわかっていない19歳の少年に、店の経営はもとより行政への申請など社会的なことを一人でやれというのは過酷なもの。▼待っているのではなく手を差し伸べてくれる専門家が欲しい。（石）

協
社
区

いつもの居場所で、 子どもたちとの継続したつながりを

こどもの居場所活動の 状況を調査

新型コロナウイルス感染症の影響により、市内の小中学校は長期に渡って休校が続く事態となった。

日頃からの居場所活動は中止せざるを得ない状況になるな



お弁当が子どもたちへ



本日はテイクアウトの日

困難に直面している子どもたちのために、今できることをしたいという思いをもって、模索しな

結果、学校休業期間中は通常通りの開催は難しいとの声が多かったが、そのような状況の中でも、各団体は、感染症対策をしながら、形態を変えてお弁当やお菓子を配付するなど、

ど、子どもたちの孤立を深めてしまうおそれや食の確保の面でも懸念された。大阪市ボランティア・市民活動センターでは、現状を把握し支援につなげていくため、地域子ども支援ネットワーク事業に登録する130団体を対象に、3月と4月にこどもの居場所活動の状況調査を実施。

がら活動に取り組んでいた。 こどもたちとのつながりが 途絶えないように

このような中、大阪市社協・区社協が5月下旬から取り組んでいる「外出自粛高齢者・障がい者等見守り支援事業」の一環として、これまでのつながりが途絶えないように、5月27日、31日に、みんな食堂等（こどもの居場所活動を含む）にお弁当を提供する取り組みを実施した。この枠組みに沿って、地域こ



地域子ども支援ネットワーク事業へ物資の提供
(左：大阪市ボランティア・市民活動センター 上野谷加代子所長、
右：NPO法人日本もったいない食品センター 高津博司さん)

また「活動を応援したい！」という企業や団体から、地域子ども支援ネットワーク事業へ、たくさんの物資の提供があり、こどもの居場所活動の大きな力となっている。今後とも子どもを支援する団体や企業、地域の

の事情のなか、さまざまな団体が、こどもたちを支えよう、つながり続けようと日々取り組まれている。

でも支援ネットワーク事業登録団体に呼びかけ、30団体から申込みがあり、約1500食のお弁当が子どもたちに届けられた。支援団体からは「久しぶりにこどもたちの笑顔や話す様子を見ることができ、いい機会になった」「親子連れが続々と訪れて、マスク越しに笑顔で会話ができたのがうれしく、保護者同士、こども同士で久しぶりの再会を喜ぶ姿も見ることができてよかった」「通常通りのこども食堂ができる日が待ち遠しい」などの声があった。

感染症防止の観点から苦渋の決断で中止している居場所、感染症対策をしながら形を変えて継続している居場所、それぞれ

今後は区独自の 取り組みを一層推進

市・区社協では、引き続き高齢者や障がい者、こどもたち等の住民一人ひとりが、孤立や不安を抱えることなく、つながりをもった暮らしを続けることができるように、さまざまな事業を推進していく。

多様な関係団体間の連携を図り、ネットワークを活かしながら、区の特性に応じた独自の取り組みも一層推進していく予定である。

社会全体で
こどもを支える仕組みづくり



「地域子ども支援ネットワーク事業」ホームページ

市内の子ども支援団体の情報や事業の推進状況など、随時発信しています。

地域子ども支援ネットワーク事業 推進状況

地域でつながり続けるために

— 高齢者への配食活動を通して見えてきたこと —

「外出自粛高齢者・障がい者等見守り支援事業」の一環として、地域のボランティアの方々の協力のもと実施してきた配食活動の第1期（5月下旬～6月）が終了した。

取組みの様子と、各区・地域から届いた声を紹介する。（各区社協からの集約内容をもとに一部抜粋・要約）

外出自粛高齢者・障がい者等見守り支援事業（大阪市社協・各区社協）

- ① 一人暮らし高齢者・みんな食堂等への配食
- ② 相談窓口情報と啓発物品の配付
- ③ 民生委員・児童委員の協力による電話・訪問等による安否確認
- ④ 各区の実情に応じた区社協独自の取組み

※この事業は大阪府の交付金を受けて実施しています



ボランティアから顔を合わせて手渡し（港区 八幡屋地域）

久々の再会で「つながり」を実感

- 「元気にされているか」「バランスのよい食事はとれているか」とボランティアも心配されていた様子。対象者からは、会館にお礼の電話があったり、涙を流して喜ばれた方もおられ、普段の活動の大切さを改めて実感した。
- 「自粛中、誰ともお話をしていなかったので、ボランティアと会話できて、元気が出た」との声があった。

見守りのまなざしで変化に気づく

- 普段は会食会をしているが、配食をしたことで玄関の様子から生活の様子に気づくことができ、見守り意識が高まる機会となった。

活動を通してみえた地域の力

- ボランティアからは「早く活動したかった」「うずうずしていた」などの声があった。
- 地域で独自にマスクやメッセージ付きカードを準備しているところもあり、潜在的な力を感じた。



地域の会館内で準備して配達へ（東淀川区 下新庄地域）



地域の会館でテイクアウト方式により実施（生野区 林寺地域）

これからの活動展開に向けて

- ボランティアからは「このような取組みがあって本当によかった」との声も。これがきっかけで、6月以降に地域の取組みとして配食を実施することを検討されている地域もある。
- 準備・調整期間も限られた中で、地域のボランティアの方々の結束を感じた。配食できたことを誇りに感じしており、活動再開に向けて機運の高まりにつながった。

感染対策に気を つけながら活動再開へ

新型コロナウイルス感染症により、地域福祉活動の中止が続いていたが、緊急事態宣言が解除され、活動の再開に向けた具体的な動きも徐々に聞かれるようになってきている。

ふれあい喫茶を再開

【西成区 飛田地域】

西成区の飛田地域では、この

間、中止状態になっていたふれあい喫茶が6月11日に開催された。雨模様ではあったが、待ちわびた開催ということもあり、喫茶内は明るく賑やかな空間になった。



テーブルと机の消毒も実施（西成区）



対面を避けて机・座席を配置（西成区）

ボランティアの方々による感染対策として、会館に入る前には体温測定とアルコール消毒。座席は対面を避けて、お客さんが入れ替わる際には、テーブルと机を消毒するなどの対策を取ったことで、安心して過ごすことができる時間となった。

当日、活動場面に向いた西成区社協・地域支援担当の由浅悠さんは「4月に入職し、今回初めて地域のふれあい喫茶に伺うことができました。コロナの影響で止まっていた喫茶の再開を待ち望んでいたことを、来場される地域住民の方、運営されるボランティアの方の笑顔から感じることが



会館に入る前には検温と消毒（西成区）

できました。現在、地域での活動も少しずつ動き出しているのでも、実際に足を運び、活動者の様子に目を向けながら、今だからこその地域支援を考えていきたいと思っています」と話す。

大阪市ホームページで ガイドライン公表

【大阪市】

大阪市では、新型コロナウイルス感染症に関する緊急事態宣言が解除されたことを踏まえ、地域団体の方々が活動を再開していくにあたって必要となる対策や実施判断の参考となるよう



大阪市ホームページにPDFデータ掲載

う、「地域活動の再開検討ガイドライン」が策定・公開された。

このガイドラインは区長会議において策定され、「各区の実情に応じて基本的な考え方や参考指針等をカスタマイズして活用するための標準版」となっており、これをもとにすでに一部の区では区版のガイドラインが策定されている。

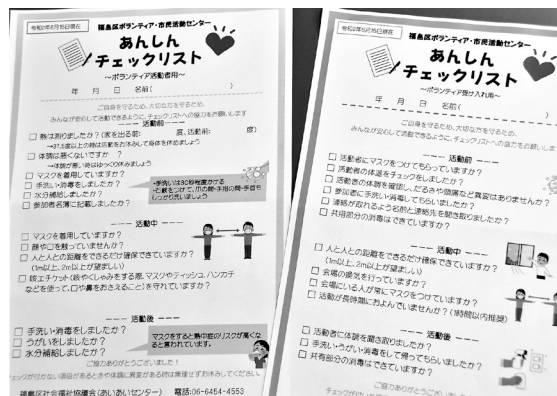
ボランティア活動再開のためのチェックリストを作成

【福島区】

先に紹介したガイドラインは、地域団体による活動を中心にとまとめられているが、各区社協のボランティア・市民活動センターの取組みについても、感染対策に気をつけながら活動再開するための手立てが検討されている。

福島区ボランティア・市民活動センター（福島区社協）では、独自の「あんしんチェックリスト」を作成した。「ボランティア活動者用」と「ボランティア受け入れ用」の2パターンがあり、「活動前」「活動中」「活動後」と、それぞれがあげてはめて考えやすいようなチェック項目（計13項目）が用意されている。作成に携わった福島区社

協・地域支援担当の大浦瑞来さんは「緊急事態宣言が解除され、ボランティア活動者の方から『活動を再開したいが不安』『今後の活動をどのように考えていけばいいか』というご相談を受けました。ボランティア活動においても『新しい生活様式』に基づいて、活動方法を検討していく必要があります。そういった状況の中、活動をおこなうにあたって、ボランティア活動する方・活動を受け入れる方、双方が安心できるよう気をつけていただきたい点をまとめたチェックリストを作成しました。区内でも活動が少しずつ動き出しています。こういったツールもうまく使いながら、コロナ禍での活動をサポートしていきたいと思っています」と話す。



わかりやすく項目分けされたチェックリスト（福島区）

シカゴの 社会福祉

視察研修参加者レポート⑦

さまざまな違いの中に 見つけた共通した想い

社会福祉法人 四恩学園 児童養護施設 四恩たまみず園 田口 知美 さん



ペアレンティングティーチャーによる
家庭訪問時の様子

昨年11月11日に、シカゴ市にある MSV Project Hope という施設を訪問しました。MSV Project Hope は、13～19 歳までの妊産婦を対象に、「子育てスキルの習得教室」「親子の関係作りのアクティビティの提供」「家庭訪問」等のプログラムを通して、若い母親をサポートする施設です。

訪問した際、家庭訪問時の様子を見学させて頂きました。ペアレンティングティーチャーと呼ばれる保護者教育を行う資格者が、こどもと遊ぶ中でこどもの発達状態を確認したり、母親からこどもや家庭の情報を聞き出し、母親にこどもへの声かけの仕方を教えていたりと限られた時間の中で、さまざまなことを同時に行っていました。ペアレンティングティーチャーのこどもや母親に寄り添う姿は、とても印象的でした。

また、MSV Project Hope には、同じ施設内にこどもたちへの放課後プログラムを提供している

Project Hope Junior という活動もあります。12 歳までのこどもたちを対象に興味の活動やこども同士で仲良く過ごすための力を身につける活動をおこなっています。活動に参加しているこどもから「家族の一員としてここに居ることが嬉しい」という言葉を聞き、こどもたちがここの出会いや活動を楽しみにしており、こどもたちにとってこの場所がかけがえのない居場所になっているのだと感じました。

今回の研修では、日本とアメリカの文化や制度、考え方等、さまざまな違いを感じました。しかし、今回の訪問を通して、利用者に「寄り添うこと」を大切に、利用者にとって「かけがえのない居場所」になることをめざす、という想いは、国が違っても共通しているのだと感じることができました。

今回の研修での学びや気付き、そして自分自身が感じたことを今後にいかしていきたいと思っています。



ペアレンティングティーチャー・
利用者の方との交流

風をよむ

社会的混乱と新たな社会の創造

大阪市立大学大学院 生活科学研究科 准教授 野村 恭代

新型コロナウイルス（COVID-19）の世界の感染者は700万人を超え、感染死者は40万人を超えた。（2020年6月現在）このような状況において、日本をはじめ世界中で、新たな脅威を前に人々の生活は一変した。あたりまえのことがあたりまえでなくなる、誰もがそのことを否応なしに実感することとなった。

マスクが店頭から姿を消し、高値で売買される日が来ることを、だれが予想していただろうか。一時期は、少しのマスクを大勢の客が取り合う姿が連日にわたり報道されていた。また、自粛を要請されている店舗に対し、「自粛警察」と呼ばれる市民が嫌がらせをするという行為も見られた。地下鉄の車内で咳をしよ

うものなら、乗車している人々が一斉に咳をした人に冷たい視線を送る。人が人を「見守る」のではなく、監視する行為が横行した。このような状況は、社会的

混乱が生じ、社会的危機の状態にあるとみることができ。ここ数年月間は、未知の脅威の出現により価値観の混乱が生じ、そのことによって人々がこれまであたりまえにおこなっていた社会統合への動機を見失い、社会秩序が崩壊しつつある状態だと言える。ただ、このような社会的危機は、一方で新しい価値観と新しい生き方を生み出す契機となる。日本を含む世界中で、新しい生活様式が生み出され、それがこれからの主流になることもある。社会的混乱とそれに伴う社会的危機は、新しい社会秩序を生み出し、社会体制全体の変革のきっかけともなりうるのである。

混乱が生じている今だからこそ、お互いが協力し、誰かを批判したり、誰かに責任を押し付けたりするのではなく、ともに混乱状態を乗り越えるための方策を講じ、地域共生社会の構築をめざすことが求められる。

企業・商店×地域

— つながる・ひろがる 地域貢献活動 —

5 参画と協働のための
地域福祉ガイドブック

企業・商店
×
地域

つながる・ひろがる 地域貢献活動



大阪市地域福祉活動推進委員会
(社会福祉法人 大阪市社会福祉協議会)

冊子のPDFデータは
市社協HP内に掲載

この冊子は共同募金分配金を活用して作成しています

1 商店街買い物ツアー 行こう！フレック!!

買い物の楽しさをもう一度
企業と地域の連携 (西区)



ちょっとしたサポートが
地域活性につながる

2 スマイル八百屋さん (移動販売)

介護保険ではなく、地域連携でインフォーマル
なサービスを構築 (平野区)



事業所の思いと
地域の悩みが一つに

3 ラムネプロジェクト

ラムネを通じ地域行事などで
募金に参加 (都島区)



自分たちのまちは
自分たちでよくする

「やりたい」と
「足りない」をつなぐ

大阪市社協と区社協には、企業や商店と、地域の活動をつなぐ(コラボレーション)、福祉課題の解決や地域の活性化につながる役割があります。それぞれの地域の特性に合わせたオリジナルティに溢れた取組みにより、さまざまな発見や気づきもあり、さらなる取組みが展開されています。企業や商店の地域参加の機会が増える、企業・商店の「やりたい」と地域の

「足りない」部分が重なりあい、さまざまな相乗効果を生み出すことができます。

この冊子は、企業・商店と地域とのコラボレーション事業を紹介することにより、今後の活動の推進につながることをねらいとしています。

企業・商店の方々が地域貢献のイメージをつかむきっかけとして、地域住民の皆さんが大阪市内の企業・商店の活動を知り、今後の協働を考えるための冊子として、また社協職員等の福祉専門職の方がさまざまな地域貢献活動を推進するた



6 あびんこ100円商店街

みんな集まってお得に買い物！気軽に仲間づくり！（住吉区）

商店街のにぎわいでまち全体を元気に！

4 オンテくん子ども食堂

地域住民の新たなつながりをつくる（浪速区）

地域のこどもは地域で育てる・見守る



7 企業・団体などの異業種交流会

企業とNPO等団体のマッチング（市内各区）



交流の場・出会いの場

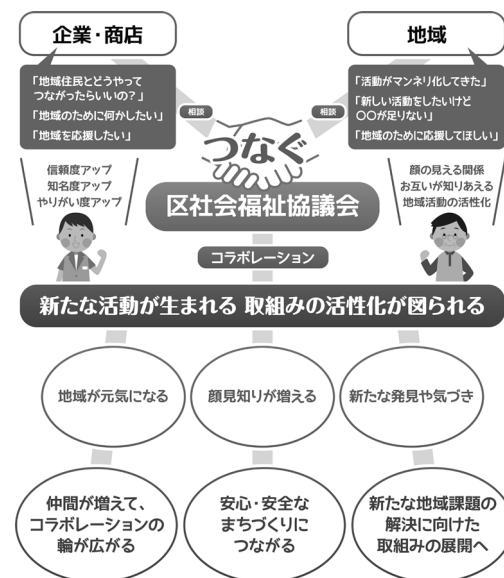
5 てへぺろキッチン

認知症によるまちがいが許される地域づくりをめざした広域的な連携（此花区）



応援したい！やりがいを！

コラボレーションの流れ



（冊子内P.5）

このガイドブックを参考に、今まで福祉と関わらないと思われていた方々とも出会いを広げていくことや、地域福祉をすすめる大きな力になります。ガイドブックは、市社協ホームページ（トップページ）いろいろな知りたい↓調査研究・報告書コーナーからご覧ください。

めの周知・説明資料として活用できるよう、コラボレーションの流れやポイントなどをまとめました。

さまざまな

コラボレーションを紹介

地域の活動者が抱えている困りごとは、「ヒト」「モノ」「カネ」「場所」「参加」に関するものが多くあります。対して、企業や商店として力になれることもあります。

企業・商店と地域がコラボレーションするには、多くの場合、誰かが「つなぎ役」になっていきます。例えば区社協へ相談することで、コラボレーションの流れをつくることができます。

区社協では、出会い・話し合いの場などを設定し、よりよい取組みとなるよう、さまざまな支援や調整をおこないます。

また、企業や商店ならではの活動と「強み」を活かし、地域とともに活

動を展開している事例や新たな活動へとつながった事例など7つのコラボ事例を収録しています。このガイドブックで紹介している事例では、さまざまな出会いや人間模様が描かれています。

主に区社協が「つなぎ役」となり、企業や商店、地域、社会福祉施設、ボランティアグループ、NPO法人、学校、行政など、さまざまな機関が協働する取組みについて、「関わる人の思い」「効果」「大切にしていること」等をまとめています。

企業・商店の思いと強みを地域へ

多くの企業・商店は、「何か社会のためにできることはないだろうか」という思いをもっています。加えて、業務にともなう専門知識や技術、店舗（場所）や機材などももっています。それらをもとに力を発揮する際に「地域」は身近な舞台となることができます。

はじめまして! こんにちは♪

NPO法人
子どもネットワーク・ワルツ

NPO法人のご紹介 ▷ 66 ◁

いつも最優先は子どもたち

NPO法人子どもネットワーク・ワルツは、日を追うごとに厳しい状況に陥っている子どもたちの状況を地域でサポートし、子どもたち一人一人が自信を持ち、学校を初めとした身近にいる大人を信頼し、子どもたちが子どもとして当たり前前に過ごすことができる居場所の提供や、未来への夢を育みながら自分自身を肯定出来る大人へと導くことを目的として活動しています。

具体的には子ども食堂「もぐもぐ」を運営し、月1回の夕食提供と定期的な物資の提供をおこなっています。そこでの関わりを継続することにより、子どもたちが抱えている困難な状況を共有し、解決への糸口を見つけ、身体的、物理的サポートをおこなっています。子どもたちを取り巻く環境は、日に日に厳しい状況に陥っておりますが、2003年に成立した個人情報保護法により、



“子どもたちの幸せを願って” 法人スタッフの集合写真

個人情報には大量に情報を扱う業者のみならず、小さな地域社会にも浸透し、それが結果的に地

域で守らなければならない子どもたちを孤立させてしまったように思えてなりません。もちろん安易に情報を公開するのは避けるべきではありますが、学校や地域とのつながりは、子どもたちが一番最初に経験する社会です。この地域社会はオープン状態が結果的には子どもたちに望ましく、見守りにつながりやすいと思います。

私たちの法人スタッフは、地域で共同保育を長年おこなってきました関係上、長いお付き合いがあり、気心も知れ、この繋がりや地域社会で活動をおこなっていく上でも、子どもたち同様にお互いにサポートされつつ継続活動をおこなえているのだと思っています。子どもたちもいつかは成人し、自身の子どもを持つようになっていきますが、当たり前前の生活をして当たり前前の社会人としての知識や社会性を身につけて社会に飛び立っていけるように、私たち大人が意識を持ってサポートしていく姿を表現することも地域への取組みとして重要課題だと思っています。子どもたちの幸せを願ってやみません。

(事務局) 〒535-0022大阪市旭区新森5-12-26
TEL 06-9881-8810
E-mail waltz@yahoo.ne.jp
HP <http://waltz.kids.coocan.jp/>

善意銀行

令和2年1月15日～令和2年6月15日の預託・払出は次のとおりです

預託

<金銭>全日本不動産協会大阪府本部50万円
<物品>大阪海苔協同組合から車いす10台▶スマイルチルドレンからマスク750枚▶株式会社セブン・イレブン・ジャパンから食品・生活用品等1,690箱

払出

<金銭>大阪市成年後見支援センター運営助成として24万円▶大阪市児童福祉施設連盟へ50万円▶大阪の社会福祉の歴史保存・伝承助成として大阪社会医療センターへ50万円▶地域こども支援ネットワーク事業として市社協へ705,871円
<物品>大阪市障害児・者施設連絡協議会へ車いす10台▶大阪市児童福祉施設連盟へマスク750枚▶市社協・24区社協・施設協加盟6施設へ食品・生活用品等1,690箱

立ちどまらない保険。

MS&AD 三井住友海上

三井住友海上の安心



クルマの保険 家・持ち物の保険 火災の保険

www.ms-ins.com

令和2年度赤い羽根共同募金

《赤い羽根賞》

(和歌山県イラストレーター!)
クラフィツデザインー
作者 中畑 康代さん
なかはた やすよ
「バッジの直径は18mm程度」



《製作意図》

「2020の年号を赤い羽根、ハート、笑顔で表現」

10月1日から全国で実施する第74回赤い羽根共同募金運動で使用される記念バッジのデザインが決定しました。近畿6府県から寄せられた215点の応募作品の中から、選考委員会の審査の結果、赤い羽根賞(採用作品)1点、愛ちゃん賞5点、希望くん賞20点を決定いたしました。

記念バッジは、今年度の共同募金運動期間中に、共同募金に協力いただいた方へのお礼や、共同募金をPRするためなどに、近畿6府県を中心に広く活用されます。

記念バッジデザイン決まる